

これからの医療ソーシャルワーカーの学部教育を考える

— 新任ワーカーを対象としたグループインタビューを通して —

村 上 信¹, 佐 藤 真由美²
濱 野 強³, 藤 澤 由 和⁴

1. はじめに

近年、患者中心の医療が求められているなかで、単に疾病を治療するという観点ではなく患者の生活の質の向上のニーズに応じた医療の提供が求められている。医療分野で働く社会福祉士、すなわち医療ソーシャルワーカーには、今後、患者を中心とした医療の提供がその理念にとどまらず現実化することが求められていくなかで、患者と各種の社会資源をつなぐ連携や調整機能を強化して、患者の生活の質の向上に貢献する役割が期待されている（村上，他2008；白澤2007）。

そうした流れは、一連の制度変遷においても明らかである。2006年4月には、社会福祉士養成における実習指定施設に病院等が追加され、同年4月の診療報酬改定では社会福祉士が「ウィルス疾患指導料」の施設基準に認められたほか、「回復期リハビリテーション総合計画評価料」，「退院時リハビリテーション指導料」，「在宅時医学総合管理料」の診療報酬評価においても明記された。さらに2008年度の診療報酬改定では、医療ソーシャルワーカーの連携機能が最も発揮される退院支援業務が社会福祉士の資格をもって行われる場合に診療報酬で評価されるなど医療ソーシャルワーカーの業務は保健・医療制度の中に位置づけられている。また、2007年11月に改正された「社会福祉士及び介護福祉士法」においては、社会福祉士の役割として「医師その他の保健医療サービスを提供する者等と連携して業務を行う」ことが明確化され、さらには社会福祉士の資質の向上を図るために教育カリキュラムの見直しと並行して行われるなかで、医療ソーシャルワークとの関連では「保健医療サービス」が必修科目として配置された。

その一方で、実践的な視点に基づき、患者のニーズにいかに対応していくかという視点で

¹ 淑徳大学総合福祉学部，² 社会福祉法人つばめ福祉会，³ 島根大学プロジェクト研究推進機構，

⁴ 静岡県立大学経営情報学部公共政策系

の具体的な内容や方法に関しては、未だ明確なエビデンスは提示されていない現状にある。上述のとおり、患者のニーズに対応した援助を提供するためには、患者をとりまく他専門職との連携が不可欠であり、たんに医療ソーシャルワーカーの知識的な側面を検討するだけでは十分ではないと考えられる。従来、医療ソーシャルワーカーを対象とした学部教育の検討については、基本的に社会福祉士の養成カリキュラムに基づき展開されてきた教育の一環として位置づけられてきた傾向にある。しかしながら、2006年4月より、社会福祉士の社会福祉現場実習の実習指定施設に病院等の医療機関が追加されたことなどを鑑みると、医療現場に即した教育内容のより一層の充実が求められている現状にあることは言うまでもない。言い換えれば、医療現場において求められている業務内容を鑑み、「実践力」の向上を意図した教育内容の必要性が認識される。

上記の制度的な変遷と学部教育の現状を問題意識として、本研究においては、社会福祉士の養成校の学部課程を卒業し、医療ソーシャルワーカーとして医療機関などに就職した新任の医療ソーシャルワーカーを対象とした学部教育に関するグループインタビューを実施した。そこで本稿においては、明らかとなった結果を総括し、今後の学部教育に対する視点より考察を行なうことを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象者

N大学およびK大学の社会福祉士養成課程を修了し、医療ソーシャルワーカーとして勤務して3年以内の卒業生に協力者を募り、本研究の目的を理解して協力を申し出た者に対してグループインタビューを下記の2回において実施をした。第1回目は、N大学社会福祉学科の卒業生で現職の医療ソーシャルワーカー（卒後1～3年）9名を対象として、2007年12月に実施した。第2回目は、第1回目の一部の協力者、およびK大学医療福祉学科の卒業生で現職の医療ソーシャルワーカー（卒後1～3年）11名を対象として2008年3月に実施した（表1）。

なお、協力者についての個人情報を守られること、あくまで自由参加であることを伝え、

表1 調査対象者の概要

	職 種	1 回目	2 回目
病院	MSW	4 名	7 名
病院(精神科)	PSW	2 名	2 名
精神科デイケア	PSW	1 名	2 名
介護老人保健施設	支援相談員	2 名	0 名

表2 フォーカスグループインタビューの項目

議論内容1

- これまでどのような仕事（業務）をされてきたかに関して
- 所属機関・部署，仕事（業務）内容・期間，組織体制など

議論内容2

- 就職してからの仕事（業務）で苦労したこと（していること）
- 具体的な仕事・業務に直接かかわること，かかわらないことなど

議論内容3

- 問題点克服の経験

議論内容4

- 苦労や問題点克服の際に模倣すべき先輩や上司の存在
- （いなければ）どのような形で業務・仕事のモデルを想定してきたか

議論内容5

- 現在仕事をするに際して，在学中に学んでおきたかったテーマなど

議論内容6

- 仕事・職場での満足感に関して

議論内容7

- 医療ソーシャルワーカーと医療（介護）サービスの質に関して

グループインタビューの結果は研究の一環として報告することを説明した。

(2) 調査方法

グループインタビューのファシリテータは，社会福祉士の学部教育を実践している専任の大学教員が担った。なお，具体的な内容については，事前に表2に示した議題を設定し，第1回目，第2回目ともに同様の議題を用いた。なお時間の制約上，1回目では議論内容1～5まで，2回目では1～6までのインタビューに関して行なった。

3. 結果

議論内容1についてであるが，今回のグループインタビューの参加者は大学の学部課程を卒業後ソーシャルワーカーとしての職歴が入職後1～2年目の者10名，3年目の者が1名であった。また，業務内容は，所属先の種別や機能によって異なっており（表1参照），全く同様の業務内容を担っている参加者は存在していない。つまり，具体的に挙げられた業務内容は，非常に多岐にわたっていることが明らかであり，相談業務以外に入退院（入退所）のベットコントロール，患者・利用者・その家族からの苦情対応，病院事務方の宿直，未収金の請求業務や医師会の事務局としての対応などを行っている現状が明らかとなった。そうした一

連の業務を例えて、複数の参加者は自らの業務を「何でも屋」と表現している点は特筆すべき結果であると考えられる。すなわち、出席したすべての参加者が「ソーシャルワーカーの業務とは何であるか」という専門職種としての位置づけに悩み、日々の仕事に真摯に取り組んでいる様子が明らかとなった。なおソーシャルワーカーとして入職後、約1ヶ月から5ヶ月で相談援助のケースを受け持つ参加者が多く、そのケース内容については職場にソーシャルワーカー職が配置されている場合では「簡単なケースから徐々に」という教育的段階を経ながらの受け持ちという配慮がなされているが、次々に生じる多種多様なケースを持たざるを得ない参加者もいた。その一方で、いまだソーシャルワーカーとしての相談業務を行っていない参加者（1名）もみられた。その理由としては、職場における他職種のなかでソーシャルワーカー職への理解が乏しく、業務分担が十分に認識されていない現状が指摘されていた。

議論内容2についてであるが、現在、抱えている苦労について職種経験年数の浅い参加者ほど、「現実として、何をどうしたらいいのか分からない」という意見を述べていたが、そうした状況は入職時における職場の他職種、または同職種からの配慮の有無によって異なっていた。すなわち、「ソーシャルワーカー職としての先輩・同期の存在」、および「職場のソーシャルワーカー職への理解や受け入れ状況」が職種経験の浅いソーシャルワーカーの業務面や精神的な側面において重要な役割を果たすことが示されていた。

つまり「職場内にソーシャルワーカーの先輩・同期が存在していない」参加者は、「仕事分からないこと」や「何をどのように動いたらよいか分からない」ことを相談できる人が身近にいないことから生じる苦労や不安を挙げており、それは「ソーシャルワーカーの先輩・同期の存在」する参加者に比べて顕著であった。また、「職場のソーシャルワーカー職への理解や受け入れ状況」が比較的乏しい職場の参加者は、周囲からの無理解やそこで生じる溝を埋める苦労を感じており、そのため「どのように理解してもらえばいいのか悩んでいる」という、いわゆるソーシャルワーカー職の立場を組織内でいかにして築いていくか、また他職種との連携における苦労を挙げていた。さらには、「同じ職場内にソーシャルワーカーの先輩・同期が存在しない」、および「職場のソーシャルワーカー職への理解・受け入れ状況が比較的乏しい」という状況が併存している参加者については、職場内での孤独感を感じていることが述べられており、自身のソーシャルワーカーとしての揺らぎを感じている傾向にあることが示されていた。

また、十分な職務経験を有していない参加者については、「知識や経験の浅さより生じる実践力が伴わない自分に対する不安や自信の欠如」を示していた。具体的には、医療制度や年金申請の書類1つをとっても、「どこで何をしたらいいのか分からなかった」と述べており、毎日が確認しながらの業務であることが多くの参加者から指摘されていた。

議論内容3、および4については、先に述べた苦労や不安の克服の経験について、全ての参加者が以下の2つの克服法について指摘していた。1つ目は「職場内のソーシャルワーカーの先輩や同期に相談する」、2つ目は「県や地域で行われる同業者の勉強会やワーカー協会の研修に参加する」である。そうしたなかで、同じ職場内に頼るべき上司、先輩、同期がない場合においても、勉強会や研修会で知り合った他職場の先輩や同期、また大学時代の同期を相談相手に具体的な業務上の不明点を解消するために活用し、自身の不安や悩みの相談を行っていた。実際に両インタビューに出席した参加者からは、1回目の状況下においては自分の対応の未熟さに自信を失っていたが、同様の環境に直面している他の参加者との議論を契機としてその間の3ヶ月間の実践の中で困難事象に対応する能力を身につけたケース、研修や勉強会への参加、相談できる先輩や同期との繋がりをもつことで自身の抱える不安を解消できたことが述べられていた点は大変興味深い知見である。

さらには、一部の参加者においては、看護部長やリハビリテーション部の部長（理学療法士）という他職種への相談、また一部の職場ではプリセプター制度を導入し、職員同士が相談しやすい職場環境を整えている現状が指摘された。

議論内容5の大学在学中に学んでおきたかったテーマとして参加者より指摘された内容は、実際に現場を見学する機会、現場の職務には直接関係しないが人間性や感性の部分での幅を広げるために有用な情報を得る機会、現場の職員からの話、他職種の業務や視点の理解、病院の機能別のワーカーの職務、交渉術、医療制度・介護保険制度など実際の手続き書類とその流れ、実践的なインテークの練習、プレゼンテーションの技術が指摘されていた。とりわけ、多くの参加者からは、現場ですぐに役立つ内容、すなわち各種制度の実際の手続きの方法や面接技術という意見が示された。

最後に議論内容6については、仕事・職場での満足感に関して参加者から満足感を得られているとの意見が示された。具体的には、「利用者からの笑顔を得る満足感」、「利用者や他職種の職員から頼りにされること」、「責任感（がある）」などであった。また、その業務を達成していく経過に自身の成長を見い出し、職務としてのやりがいを感じている参加者もみられた。

4. 考察

今回のインタビューの結果を概観すると、卒業後1～3年のソーシャルワーカーの感じている苦労や不安は、ほとんど共通の内容であることが明らかとなった。そうしたなかで、生じている苦労や不安に多少の差異は示されているものの、業務における「何をどうしたらいいのか分からない不安」を、一時期に体験している点が明らかとなった。

つまり、大学で学んだことを実際に活かそうにも、現場で求められるのは具体的な知識や

行動を伴う即戦力であり、その点において学部卒業後1～3年のソーシャルワーカーにそうした蓄積が浅い点と言うまでもない。こうした現状から、参加者の多くが大学で学びたかった内容として、各種制度の実際の手続きの方法や面接技術、現場の人から話しを聞きたい、現場でもっと学びたいという意見が示されたと考えられる。そうした現状をふまえ、具体的に上記に対応した学部教育を実際に提供できることとして取り入れられる要素はあるものの、ニーズに応える内容をどの程度、学部教育において提供していくべきであろうか。

たとえば、他の保健医療福祉専門職種に目を向けると、医療や福祉の現場で同様に働く看護職や介護職などの他職種からは「自らの職務に対して何をどうしたらいいのか分からない不安」という話は聞かれにくい。それは、看護師や介護職などの他職種に比べて、ソーシャルワーカーは、多様な資源を活用した連携や調整などコミュニケーションがその主たる技術であることから、経験の少ない卒後間もない職員が職務上の不安を多く抱えやすいことが考えられる。その場合、即戦力を意識すると、学部教育においては、現場での経験を重視する視点が強調されよう。

その一方で、ヒアリング調査で聞かれた意見を整理するなかで、彼らの苦労や不安は経験年数を経る中で、解消されていることも明らかとなった。すなわち、「最初はできなかったことが今ではできるようになっていることが多くなっている。(中略)いつかはできるようになるだろうという何か成長していくのが自分の楽しみ」という意見や、同じ業務をしているなかで、同じ職場に働く先輩達は自分たちの様にパニックにならずにいるというような意見が示されていた。つまり、こうした状況を鑑みると、大学で現場の状況をどの程度について学べたかという教育内容の差ではなく、自身の組織内におけるソーシャルワーカーの立場の明確化やソーシャルワーカーとしての経験から来る差異と言うことも考えられる。

したがって、上述の通り、ソーシャルワーカー業務の特殊性もあるが、ここで述べられるソーシャルワーカーとしての経験が1～3年の参加者にとっての苦労や不安は、新入社員として勤務した場合に、どの職場においてもみられる特徴であるとも考えられよう。その場合、大学での教育として、短期的な苦労を減らすための実務的な教育よりもむしろ、ひとりのワーカーの苦労や不安に留まらない「ソーシャルワーカーの業務とは何であるのか」という問いに対する解としての長期的な土台作りとしての根本となる教育が重要であると考ええる。

以上の点を鑑みると、今回の調査においては、職場の組織的な問題として、組織内におけるソーシャルワーカーの位置づけが明確にされていないことや職員全体に理解が及んでいないことが組織内でソーシャルワーカーを働きにくくさせていることとして存在していることが考えられた。そのときにソーシャルワーカーとしてのコアの部分、すなわち信念や価値観を大学においてしっかりと教育し、培うことが重要になると考えられる。そして、ソーシャルワーカーとしての土台をしっかりと培ったワーカーは、勤め初めこそその苦労や不安はあっ

ても、自身の専門性を基盤として乗り越えることが出来るのだと考える。

4. おわりに

医療現場において求められている医療ソーシャルワーカーの業務内容を鑑み、「実践力」の向上を意図した教育内容の必要性が認識される。そこで本研究では、上記の制度的な変遷と、学部教育の現状を問題意識として、社会福祉士養成校の学部課程を卒業し、医療ソーシャルワーカーとして医療機関などに就職した1～3年目の医療ソーシャルワーカーを対象とした学部教育に関するグループインタビューを実施した。その結果、参加者は共通して自らの業務に対して「何をどうしたらいいのか分からない不安」を、一時期に体験している点が明らかとなった。その理由としては、ソーシャルワーカーの職務の専門性としての経験不足よりむしろ、学部教育においてソーシャルワーカーとしてのコアの部分、すなわち信念や価値観を大学において教育し、培うことの欠如が起因となっていることが考えられた。

謝辞

調査にご協力をいただきましたN大学、K大学の卒業生の皆様に記して深く感謝申し上げます。本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「医療ソーシャルワーカーの学部教育プログラムに関する研究（研究代表者：村上信）」における研究成果の一部を取りまとめたものである。

参考文献

- 村上信，濱野強，藤澤由和．社会福祉士の学部教育の方向性．新潟医療福祉学会誌．8(2)．72-76．2008
- 白澤政和．近未来の社会福祉教育：社会のニーズにいかに応えるか．学術の動向．81-84．2007．

Issues on Educational Programs for Future Social Work

— Evidence through focus group interview with
newly qualified social workers —

MURAKAMI, Makoto, SATO, Mayumi
HAMANO, Tsuyoshi, FUJISAWA, Yoshikazu

In recent years, it is necessary to provide not only the explanation of the concept of social work, but also the practical knowledge and skills for students in the social work course. However there is no evidence for the efficacy of educational program to support that trend. In this article, we discussed about how to reform the current undergraduate educational programs which is suitable for practical work based on focus group interviews designed to explore the core competences of social workers.